

Title	児童養護施設における日常生活の社会学 : 「家庭的な養育環境」の再検討
Author(s)	三品, 拓人
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81974">https://hdl.handle.net/11094/81974</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 三品 拓人 )

## 論文題名

児童養護施設における日常生活の社会学  
—「家庭的な養育環境」の再検討—

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、「児童養護施設の生活がいかに営まれているのか」、「そこにどのような問題があるのか」という問いを明らかにすることである。そして、「家庭的な養育環境」を再考することである。

これまで、施設という形態では子どもの社会化が適切に行うことができない点が歴史的に論争の的になってきたほか、施設が「家庭」でないことを理由として、施設がもつ子どもの社会化の可能性が低く評価されがちであった。

近年、里親委託や施設の小規模化が推進されている。先行研究では、施設入所以前に抱える問題、そして退所後に直面する問題が明らかにされてきた。しかし、どこまでが個人の問題、施設の問題、社会の問題か不明なままに施設生活において生じる様々な問題が子どもの心理状態や生育環境に還元されてしまう。同時に、そのような問題が「家族」や「家庭」ではないがゆえに生じているとも限らない。

2章では、方法について説明した。児童養護施設にて参与観察調査を行うことによって、起床から就寝まで入浴や外出、通院、施設のイベントなどを含め、施設生活の様々な側面を観察した。

3章では、施設生活を理解するためにエスノグラフィー的記述によって、児童養護施設がどのような空間・時間配置の中にあるのか、そしてどのような人間関係のもとで暮らしているのか、または施設の中で生きることで何を体験しているのかという点について、特定の場面だけではなく、より雑多で些細な点にも目を配りながら明らかにした。そこから、少なくとも外形的には、家族実践として扱われている活動に近い営みが施設でも行われていることを示した。このような営みの中で何が問題になるのか、以下の章で検討した。

4章では、児童養護施設出身の子どもがなぜ学校で「友人」を築きにくいのかを検討した。施設生活を経験した子どもが孤立しがちで、新規に人間関係を形成することが困難であるという先行研究に対して、単に社会性の欠如や子どもの性格などの個人要因に還元されない、構造的な問題を発見した。子ども達は施設内では多様な〈仲間〉関係を形成する一方で、学校における〈友人〉関係が維持されにくい現象を可視化し、新たな説明を加えた。

5章では、児童養護施設の中で、子どもの身体的暴力がなぜ起こるのかを明らかにした。このとき着目したのは従来指摘されてきた愛着不足やトラウマ、施設環境でのストレスなどの心理学的要因ではなく、ジェンダーの問題である。様々な小学生男子の暴力を観察し、それらの行為の意図や文脈が多様であることを描くことで、施設に入所する子どもという特性に還元せず、身体的な暴力をコミュニケーション手段として用いる「男子性」が施設内で「凝縮」される結果として生じている可能性を提起した。

6章では、施設で暮らす子ども同士の間の「差」に着目した。これまで施設と家庭の格差や、施設間の格差が取り上げられてきたが、子ども同士の差に関しては相対的にあまり着目されていなかった。しかし、施設の子どもの間には、社会関係、所有物、行為の自由度の点で差があり、保護者の存在が関わっていることが浮かび上がった。その差によって、「家庭」がよく見えてしまう点や子どもの欲求が喚起されるようなメカニズムがあり、そこに関わって調整する職員のジレンマを明らかにした。

7章では、なぜ施設においてルールが存在し、どのようにとらえられているのかを検討した。ルールは、子どもの健康や安全に配慮した結果であったり、出身背景や文化を踏まえていたり、子ども同士のトラブルを防ぐ意味があったりした。そして、むしろ職員自身がルールを相対化することを望んでいる一面がある一方で、施設が責任を第一義的に負わされる構造上、相対化しきれない側面が明らかになった。

8章では、そのようなルールなどをはじめとした価値観や基準に「家庭」が関係していることに着目した。その結果、子どもも職員も自身が経験してきた環境こそが「家庭」であると思念していることが明らかになった。生活に必要なものの大きさや、些細な注意やしつけの判断基準として「家庭」が用いられていた。その共通点は、どちらも子どもの将来の社会化を見越したものであった。その上で、児童養護施設において「家庭」が参照点になる意

義と問題点を明らかにした。

本稿の意義は以下の2点である。

第1に、児童養護施設の問題を子ども同士、職員と子どもの相互行為という観点から描き出した。このことによって、施設の子どもの暴力問題や友情形成の問題をはじめとする様々な問題に対して子どもの発達の・心理的課題という視点だけではなく、社会学的な視点からの理解の仕方を提示した。

第2に、施設職員と子どもによる家族実践的な営みを描き出すことによって、施設の養育環境に対してこれまでとは異なった理解の仕方を示したと共に、本質的な問題は家庭か施設という二分にあるわけではないということを示し、その二分法にそぐわないような間にある面を表出させた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 三 品 拓 人 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	牟田 和恵
	副 査	准教授	辻 大介
	副 査	教 授	山中 浩司

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、あしかけ6年にわたる児童養護施設非常勤職員としての参与観察に基づいて、「施設の日常生活がいかに営まれているのか」を、ミクロな相互行為に焦点を当てて社会学的観点から研究を行ったものである。歴史的に長らく、施設は「家庭」でないことを理由として子どもの社会化機能が低く評価されがちであったことに加え、日本の文脈では近年、脱施設化を掲げる施策により、大・中規模の児童養護施設は、里親委託や小規模施設に転換し「家庭的養護」を行うことが推進されている。こうした状況を踏まえて本論は、「家庭的な養育環境」とはどのようなものであるのか内実が明らかでないままに良きものとして想定されていることへの疑問と、施設出身者が抱えるさまざまな問題がどこまで個人の、施設の、あるいは社会の問題であるのか不明なままに施設での養育に因を求める傾向があることについて批判的な見地から、施設での子どもたちの生活、職員と子どもたちの日常について綿密な観察を行い、これら2点について独自の考察を行った。そして施設生活に問題が生じているように見えるメカニズムを社会学的に解明していくことで、児童養護施設のケア環境の質的な向上に寄与することをめざした。

論文の1、2章では論文全体のねらいと研究の方法を示したのち、3章では施設生活を理解するためにエスノグラフィ的記述によって、児童養護施設がどのような空間・時間配置の中にあるのか、そしてどのような人間関係のもとで暮らしているのか、または施設の中で生きることで何を体験しているのか、その中にある指導やケア、親密性の形成、知識や技術の創出、継続するつながり、外部との調整等々の観点から、児童養護施設においては家族実践とみられる営みが行われていることを見出し、現場における養育環境のジレンマをより詳細に解明した。続く4章から7章では、それぞれ、施設の子どもたちの「友人」関係の築きにくさ、子どもの身体的暴力、子どもの親とのつながりの濃淡によって生じる子ども間の「格差」、施設でのルール生成と適用およびそこに生じる葛藤という、施設の生活の諸側面にわたる問題について具体的・経験的に考察し、そして最終章の8章では、施設生活の価値観や基準に「家庭」が関係しているがそれは、子どもも職員も自身が経験してきた環境こそを「家庭」であると思念していることことを明らかにし、児童養護施設において「家庭」が参照点になる意義と問題点を論じた。

以上のように本論は、児童養護施設の問題を子ども集団の仲間文化や相互行為という観点から描き出し児童養護施設環境形成のダイナミクスを提示し、職員の援助技術や単なる施設環境の問題に還元されない側面を描き出した点で意義がある。さらに、施設職員の家族実践的な営みを描き出すことによって、家族／非家族の間にある生活実践の存在から、本質的な問題は家庭か施設という二分にあるわけではないことを明らかにした。

このように、本論文は、児童養護施設をめぐるこれまで社会福祉論や発達理論等で論じられてきたのとは異なる社会学的観点から、小規模化に向かう施設について今日、より着目されるべき論点と視角を提示した優れた論考となっている。

以上から、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。